



24
「録」

隅田川の花火大会が目前に近づいている。

初めて現地に行ったときのことは忘れもしない。東京一の花火大会とはどんなものだろうと気軽に出かけたはいいが、現地はとにかく人、人、人。予想以上だった。空には大花火が打ち上がっているというのに、警備員に促され、立ち止まることさえ許されぬまま『歩き花火』というものを初めて経験した。

その反省を活かし、その次に行った時は入念な場所取りの準備をした。探してみれば、穴場となりそうな場所はたくさん出てくる。なかには「そこ入っちゃダメだろ」と言いたくなる無責任な情報もあったが、無用なトラブルを防ぐためにも、やっぱり公園のような誰でも入れる場所に、常識的かつ最大限早めに場所取りに行くのが正解だろうと思った。

当日、昼前にその公園に到着した。すでにちらほらとレジャーシートで埋まっており、期待感が高まった。

しかし花火大会が始まるまであと8時間以上もある。おやつ食べたりゲームしたり、交代で近くに散歩に出たり。今ほどの酷暑ではなかったものの、それでも夜になる頃にはもう待ち疲れでヘトヘトになり、いよいよ花火が始まって15分というところで、なんと眠ってしまった。

半分夢の中で見る花火。いや途中からはもはや見てもいない、音だけだ。いったい何をしに行ったのだろうか！

あの公園の名前はすっかり忘れてしまったが、体感的にはほぼ真上に花火が見えた素晴らしいスポットだったのだ、いつかもう一度行ってみたい。

ところで、花火といえば、いつからだろう。打ち上がるのを見ると反射的にスマホを構えるようになった。気づけば動画ボタンを押していて、現実の花火ではなくスマホの画面をのぞく。

カメラの性能に助けられ、結構キレイに撮れている。でも、あれを見返したことで、いったい何回あっただろう。

画面の奥で鮮やかに咲く花、その時はきつと誰かに見せたい思いで撮っている。

「きれいだったよ」と伝えたいのか、
「僕はここにいたんだよ」と証明したいのか。
あるいは、その両方かもしれない。

スマホのレンズを通すと、なぜか少し安心してしまう。「これで大丈夫」と思ってしまふ。でもその瞬間、なにかが遠のく気もする。

かつてベンヤミンが「アウラ」の概念を提唱したが、技術が進歩し、目の前のものを録画・複製できることで、あとでまた見れるからと気が緩み、そこにあるオリジナルなものを感じようとする気持ちが薄れてしまふように思う。

あたかもその瞬間がポケットのなかに収まったと錯覚してしまう。実際には一度きりの機会を逃しているのに。

あんなにどうでもいい会話に聞き耳をそば立てた、英語試験のリスニングテストを思い出したいものだ。トムとメアリーが週末にどこそこにいこうかと話しているような会話に、全集中してメモまで取って。

もっと目の前で起こっていることを大切にしたい。

あの日の花火はたしかに見事だった。でも思い出に残っているのは、レジヤシートの上で食べた焼きそばの味、そして、あら寝ちゃってるよって笑われた楽しくも小恥ずかしい感情。暑かったという体感的な記憶。案外そんなものだ。

こんどの土曜日、東京の空に花火があがるだろう。そしてその光景は、きっとまた僕のスマホの片隅に記録される。

誰かに見せたいと思って撮ったその映像を、僕は見返すこともないまま、次の夏を迎えるのかもしれない。